
死に際の言葉

かさのきず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死に際の言葉

【Zコード】

Z6403F

【作者名】

かわのさず

【あらすじ】

自らの手首を切り、死に近づいていく主人公の元に、彼女がやってくる。

僕の部屋のドアがいきなり開いて、一人の少女が部屋の中に入つてくる。

余りに突然ことに、僕は呆然とその少女を見つめることしかできなかつた。左手首から血を流して、右手にカッターナイフを握りしめたままの格好で。

僕は、リストカットしていた。

「どうして……」「

無意識のうちに聞いていた。

それに対し彼女はなにも言わず、ポケットからハンカチを取り出して、左手の血を止めようとする。

しかし、傷は深く、あつといつ間に小されいなそのハンカチが赤く染まつてしまつ。

「もう、いいよ

焦りを浮かべる彼女に、僕は言った。

それでも、彼女はやめようとせず、必死に傷口からあふれ出す血を拭おうとする。

「だから、もういいっての。僕はもう疲れたんだから、休ませろよ

「……いやよ

ここに来て、彼女が出した初めてのつぶやき。

それは次の瞬間、叫びとなつて彼女の口から溢れだした。

「いやよいやよいやよ！ あんたがよくても私がいやなの

「なんだよ、それ……」

「好きなのー あんたのことが……」

そろそろ意識が薄れてきた。

このまま、僕は死ぬのだろう。

「だから死なないでよ。お願ひだから……」

でも、最後に一言だけ、言わないといけない気がする。

薄れゆく意識の中、僕は全神経を集中させ、唇を動かした。

「―――」

確かに届いたと思ひ。これでもう、本当に最後だ。
目の前は真っ黒で、もう彼女の顔すらも見えない。
また意識が薄れてゆく。もう抗うことはどうになかつた。
最後に、温かなものが唇に触れ、僕は意識を失つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6403f/>

死に際の言葉

2010年10月10日06時53分発行